第一局　秘

乾船第一四五号

共同運輸會社資本增額ノ儀ニ付上申

共同運輸會社創設ノ儀ニ付本年五月三十日付ヲ以テ委詳上請仕候處七月十二日付ヲ以伺之趣聞屆金百三拾萬圓交付致スヘキニ付大藏省一協議四年間ニ割合右金額可受取旨御指令之趣ニ從ヒ乃チ該社創立ヲ許可シ命令書ヲ下付セシヨリ以來各地發起人等上京ノ上屢日來總會議ヲ開キ定款ヲ議スルニ方リ衆議躍然更ニ一歩ヲ進メ資本增額ノ儀別紙寫ノ通リ出願候ニ付熟按候ニ抑該社既定ノ資本金三百萬圓ハ他ノ業務ニ於テハ決シテ僅少ナラサル金額ナリト雖モ海運ノ業タル一隻

ノ船舶モ巨萬ノ金額ヲ要スルニ付發起人等請願ノ如ク更ニ資本金ヲ增額セサルヲ得サルノ現狀有之候ニ付左ニ其事由ヲ略陳仕候

我海運事業ニ於テ著シキ進歩ヲ見サルモノハ蓋シ其因由ニシテ足ラスト雖モ之ヲ要スルニ從來急劇ノ場合ニ臨ミ古船購入ノ獎ヨリ甚シキモノ無之試ニ我船舶ハ如何ナル場合ニ於テ其供給ヲ增シタルカヲ推究スレハ明治初紀ノ前後ニ當リ舊諸藩カ割據ノ勢ヲ構シ外商ヨリ競テ購入セシヲ第一トシ同七年台蕃征討ノ際政府ニ於テ購入セシモノヲ第二トシ同十年西南暴動ノ日政府ノ貸下金ヲ以テ購入セシモノヲ第三トスルモノ十八艘（政府ニ納付セシモノ）ニシテ其船價ノ如キハ今之ヲ證明スルヲ得スト雖モ凡百萬圓以上ナルヘシ第二ニ屬スルモノ十三艘ニシテ其代價ハ百五拾七萬六千八百弗第三ニ屬スルモノ十艘ニシテ其代價百八万七千五百弗（此内貸下金七十万弗）ナリ夫レ斯クノ如ク焦眉ノ急ニ際シテ購求セシモノナレハ所謂軍ニ臨テ矢ヲ矧ク如キ急劇手段ニ出ルモノニシテ船體ノ堅脆製造ノ新古價格ノ高低等ニ至テハ固ヨリ之ヲ撰フニ暇ナシ是ヲ以我商船業ニ已ニ無朽ニ屬シ之ヲ維持スル常費甚タ多額ナラサルヲ得ス常費多ケレハ隨テ高度ノ運賃ヲ徵收セサルヲ得ス斯ノ如クシテ即今運輸壅塞ノ現況ヲ呈出シタル義ニ有之候既ニ過般朝鮮事變ノ起ルヤ忽チ前陳ノ覆轍ヲ蹈マントスルノ時運ニ際セシモ幸ニシテ之ヲ免レ一ヲ得タル義ニ有

之候

故ニ今般創設ヒハ共同運輸會社ハ深ク既往ノ覆轍ヲ鑒ミ其船舶ノ如キモ古製ヲ購入スルヲ嚴禁シ而シテ汽船ハ總テ鐵製トシ其機関ハ聯成汽筩トシ專ラ新船ヲ製造セシムルノ目的ナレハ何分既定ノ金額三百萬圓ニテハ堅牢耐久ノ巨船ヲ製造セシムルヲ得ス到底兵商兩事ニ備フルノ目的ヲ難達府該社出願ノ通リ政府ノ株金ヲ更ニ二倍シ人民ヨリ增募ノ金額ヲ併セテ六百萬圓ニ增額為致度候間方今費途御多端諸事御節約ノ折柄ニハ候得共前述ノ状情御洞察ノ上尊ク御會議ヲ盡サレ從テ先般伺濟ノ振合ヲ以御裁令ヲ仰度依テ御參照ノ為メ別冊命令書相添此段上申仕候也

明治十五年十一月一日　農商務卿西鄕従道

太政大臣三條實美殿

上申之趣聞屈候條大藏省ヘ協議ヲ遂ケ金額交付方年割并ニ命令出改正案共取調更ニ申出事

明治十五年十二月十六日

共同運輸會社

海運ヲ興シ平常非常ニ備ヘン爲メ百三拾萬圓ヲ以テ船舶ヲ造リ其社ノ資本ヘ差加候條左ニ掲クル命令書ノ條款厚ク遵守可致事

明治十五年七月廿六日

農商務卿代理
内務卿

命令書

第一條　政府ニ於テ戰時非常ニ際シ供用スルニ足ル可キ瀨船及ヒ帆船ヲ製造シ漸次本社ヘ交付ス可シ其金額ハ先ツ百三拾萬圓トシ之ヲ以テ政府ノ株金ニ充ツ可シ

但瀨船及ヒ帆船トモ本條目的ノ爲メ要シタル增費ハ之ヲ其株金中ニ算入セサル可シ

第二條　每期政府ニ於テ領ス可キ利益配當金ハ其株金ニ對シ年貳步ヲ以テ限トシ其以上ノ利益ハ本社ノ總收入ニ組入レ保險準備等ニ充ツ可シ

第三條　本社ニ交付シタル船舶ハ總テ海軍ノ附屬ト心得可シ但臨時海軍卿ノ命令ニ依リ徵集スルコトアルトキハ相當費用ヲ給ス可シ

第四條　海軍ニ於テ使用ノ爲メ船内結構ノ變更ヲ要スルトキハ海軍省ヨリ其費用ヲ給ス可シ

第五條　戰時及ヒ非常ノ時ハ本社ノ都合ヲ問ハス政府ニ於テ其各船(政府ヨリ交付シタルモノト否トヲ問ハス)ヲ使用スル事アル可シ但其運賃ハ豫メ相當ノ額ヲ定メ之ヲ給スヘシ

第六條　海軍兵學校又ハ其他官立商船學校ニ於テ卒業シタル生徒ヲ實地航海修業ノ爲メ政府ノ命ヲ以テ本社ノ船ニ乘組マシムルコトアル可シ

第七條　政府ノ都合ヲ以テ郵便物又ハ其他官用物ノ運送ヲ命シタル時ハ相當ノ運賃ヲ給スヘシ但時宜ニ依リ一定ノ助成金ヲ下付スルコトアル可シ

第八條　本社ノ資本金ハ先以テ三百萬圓トシ其百三拾萬圓ハ政府ニ屬シ他ノ百七拾萬圓ハ成ル可キ丈ケ廣ク各地方ヨリ募集ス可シ

第九條　資本金三百萬圓ノ内貳百三拾萬圓ハ汽船ニ六拾萬圓ハ帆船ニ拾萬圓ハ營業資本ニ供スヘシ

第十條　本社ハ氣船帆船ヲ以テ旅客貨物ノ運漕ヲ目的トシ他ノ業務ニ干渉スヘカラス

第十一條　正副社長及ヒ取締役ハ株主中ヨリ公撰ス可シト雖トモ政府ニ於テ認可スルニアラサレハ上任スルコトヲ得ス但正副社長ニ限リ創立第一期(創立ノ日ヨリ三ケ年ヲ以テ一期トス)中ハ政府ニ於テ特選スルモノトス

第十二條　本社ニ於テ汽船帆船ヲ新造シ若クハ既製ノモノヲ購入セントスル片ハ豫メ政府ノ許可ヲ受ク可シ但汽船ハ二ケ年以上ヲ經過セシモノヲ購入スルコトヲ許サス

第十三條　通常海員ハ勿論船長、運轉手、機關手ト雖トモ總テ日本人ヲ採用スヘシ然レトモ當分ノ中船長其他ノ役員ニ限リ外國人ヲ雇使スルモ妨ケナシ

第十四條　例式及ヒ臨時ノ總會ニ於テ決定シタル事件ハ政府ノ認可ヲ得ルニアラサレハ之ヲ執行スルコトヲ許サス

第十五條　本社ノ業務及ヒ帳簿ハ政府ニ於テ常ニ監督官ヲ命シ若クハ臨時檢査官ヲ派出シテ之ヲ檢査セシメ不整ノ件アレハ之ヲ矯正セシム可シ

第十六條　本社ノ各船及ヒ機關ハ政府ニ於テ常時又ハ臨時檢査ヲ爲シ危險不安ノモノハ之ヲ修繕セシム可シ

第十七條　農商務省所轄ノ汽船及ヒ帆船ハ本社開業ノ期ニ至ラハ別段ノ命令書ヲ以テ之ヲ其社ニ貸下ク可シ

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

資本金增額ニ付請願

今般特典ヲ以テ共同運輸會社創立ノ御命令書ヲ下附セラレシトハ要スルニ戰時非常ノ際ニ供シ兼テ海運ノ便ヲ擴張シ商賈交通ノ道ヲ發達セシムルノ御趣意ニ外ナラサルハ顯然御命令書ニ明示シアリ又曾テ縷演ヲ辱フセシ所ナレハ今又載陳スルヲ要セス深ク銘肝且踴躍スル所ナリ爰ニ私共發起人トナリ目下府下ニ集合シ會社ノ定款ヲ議定スルニ方リ衆論ニ致資本ノ增額ヲ請願セサルヲ得サルニ至レリ偖本業經營ノ道ヲ審案熟慮スルニ起政府ノ御趣意ヲ貴徹シ下モ全國ノ公益ヲ圖ラントスルニハ第一ニ其經營ノ自的ヲ確立セサルヘカラス而テ其自的タルヤ我カ全國周圍沿海ヲ運輸ヲ通暢シ延テ海外ニ及ホシ廣ク公衆ノ便

ヲ達シ以テ内地物産隆興ノ途ヲ開キ航海ノ利ヲ謀ルニ在リ亜論ニ所謂運輸ハ國家ノ文明ヲ進ムル一大羽翼ナリトハ實ニ千古ノ確言ト謂ツ可シ本社ノ任モ亦重大ナラスヤ斯ル重大ノ任ヲ帯テ其目的ヲ達センニ如何ナル經營ヲ以テセン乎始メヨリ十分ノ冀望ハ姑ラク置キ假リニ其規摸ヲ設クルニ概ネ左ニ掲クル所ノ海運ヲ增進セサルヘカラス

東京四日市間	蒸汽船	三隻	各九百噸
東京函館間	仝	二隻	各千五百噸
東京野蒜間	仝	二隻	各二千噸
函館大坂間	仝	二隻	各千五百噸
敦賀函館小樽間	仝	二隻	各千五百噸
函館小樽間	仝	二隻	各七百噸
函館ヨリ根室方面	仝	二隻	各五百噸
敦賀伏木新潟坂田舟川箱館	仝	二隻	各三千噸
東京鹿兒島間	仝	二隻	各七百噸
琉球九州及北海道ヨリ内外諸港ヘ石炭運送	仝	十隻	各千三百噸
東京ヨリ大坂馬關長崎ヲ經テ上海	仝	三隻	各二千五百噸
東京ヨリ馬關釜山浦仁川ヲ經テ天津	仝	二隻	各七百噸
函館上海間直航	仝	三隻	各一千噸
長崎ヨリ釜山元山津浦鹽斯德ヲ經テ函館	仝	二隻	各一千噸
東京神戸ヨリ香港廈門福建ヘ	仝	二隻	各三千噸

計蒸汽船四十一隻
此噸數五万千三百噸

右掲クル所ノモノハ實際最モ樞要ノ航路ナリ就中敦賀函館小樽間ノ航路ノ如キハ所謂北海ノ要路ニシテ現ニ江北鉄道ノ如キモ稍關ケ原ニ達セントスト云フ然ルニ目下此航路ノ運便ヲ執ルモノハ只一隻ノ蒸氣船アルノミ其他近隣ノ諸港ヨリ往復スルモノアルモ一ケ月間一二回ニ過キス今日以後尚ホ此ノ如クシハ何ヲ以テ北陸ノ物産ヲ幾内東國ニ輸シ幾内東國ノ貨物ヲ北陸ニ送ルノ便ヲ達セントスル乎若シ是レカ運便ヲ達セスンハ新設ノ鐵道モ其効用ヲ奏スルニ甚タ渺カラン果シテ然ラハ北國ノ物産ハ何ヲ以テ其興隆ヲ補翼セン乎又九州及北海道ヨリ石炭運送ニ供スル海運ノ如キハ現在其不便ニ苦シテ外國船ニ依賴スルモノ少ナトセス況ヤ今後北海道幌向等ノ炭山隆盛ナル

ヘキニ於テヲヤ又函館上海間ノ直航路ニ於ケル方今海外輸出物産中重モナル部分ニ位スル昆布其他ノ海産及琉貫ノ如キ現場ニ在テハ皆ナ一時横濱ニ運漕シ轉戞シテ以テ上海香港ノ諸港ニ送ルモノナレハ其不便ナル一言ノ盡スヘキ所ニアラス故ニ直航ノ便利ヲ起ストキハ北海全道ノ物産ヲ奬勵スルニ於テ又何ノ術カ之レニ過キン是等一二ノ憑據ヲ以テスルモ前述數項ノ樞要タルヲ確證スルニ足ルヘシト信ス或ハ云ハン現時我ガ人民ノ所有スル蒸船ノ積荷噸數ハ三万六千餘噸アリ我カ國沿海ヲ運搬スルニ於テ敢テ不足ト云フヘカラスト是レ畢竟皮相ノ見ノミ何トナレハ其三万六千餘噸ノ積ハ巨大ナルニ似タリト雖モ其船舶ハ多クハ裏朽老殘ノ者ニノ實際ノ運便ニ供スヘキモノハ殆

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

シト半數ニ過キサルヘシ管ニ然ルノミナラス船舶ノ構造ニ於テ貴昂ノ運賃ヲ得ルニアラサレハ之レヲ運轉スル能ハサルモノ多キニ居レリ是レ物産輿隆ノ道ニ於テ一大障碍ト云ハサルヲ得ス且近年蒸氣船ノ需求ヲ增加セシハ世人ノ知ル所ニシテ故ラニ陳說ヲ煩タサルヘシ是レ何ノ故ソヤ物産繁殖ノ致ス所ト云フト雖ヒ要スルニ商賣ノ景況漸次改良進步シテ活潑銳敏ニ趨キシカ爲メナラスヤ今日迄既ニ此進步ヲ實驗セリ今日以後海運ノ便利ヲ擴張セハ借商賣ノ活潑銳敏ニ趨クヿ年一年ニ迅速ヲ加フヘキハ又辨說ヲ要セサルヘシ果シテ然ラハ本社ノ將來經營スヘキ目的ニ於テ前述ノ船舶ヲ要スルハ決シテ架空ノ想像ニ非ルノミナラス此規模ヲ以テスルモ遠カラスシテ尙ホ不足

ナ感スルニ至ラン然リ而テ此船舶ヲ構造センニ幾干ノ資金ヲ要スヘキカヲ推算スルニ臨時供用ノモノニ至テハ大ニ運力ヲ要スルヲ以テ其費用モ多カラサルヲ得スト雖ヒ石炭ノ運搬ニ供スルモノヽ如キハ幾分カ廉價ナルヘケレハ彼是ヲ平均シテ假リニ實量一噸ノ費用銀貨百十圓トシテ通算スルモ五百六十四万三千圓ニシテ之レヲ紙幣ニ換ルトキハ（壹圓六十錢トシテ）九百零貳万八千八百圓トナル之レニ加フルニ風帆船及倉船曳船各港ノ倉庫地所碼頭ヲ始メトシ本支店ノ家屋營業器具等ヲ概算セハ少ツモ一千万圓以上ノ資本アルニアラサレハ本社營業ノ目的ヲ達スルヿ能ハサルヘシ然ルニ御命令ノ資本三百万圓ノ額ハ他ノ商業ヲ以テスレハ隨分巨大ノ額ト云フヲ得ヘシト雖ヒ之レヲ銀

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

貨ニ換算スルトキハ貳百万圓ニ過キス斯ノ如キ僅少ノ資本ヲ以テ此ノ如キ重大ノ事業ヲ經營セントスルモ豈其目的ヲ達スルヲ得ヘケンヤ是ヲ以テ各地ノ有志者ニシテ本社ノ營業隆盛ヲ期スルニ難キヲ疑懼シ同盟加入ヲ躊躇逡巡スルモノ亦甚タ少ナカラス實ニ適切ノ思慮ト謂フヘシ是レ發起人等カ衆論一致シテ資本ノ增加ヲ請願スル所以ナリ然リト雖ヒ今ヤ遽カニ一千万圓ノ資本ヲ蒐集セントハ頗ル難事ニ涉ルヘキニ付先ツ以テ現場ノ資本金ヲ六百万圓トシ漸次此規模ニ達セシト欲ス故ニ發起人等ハ四方ニ奔走周旋シテ既定金額ノ一倍即チ三百四十万圓ノ株主募集ニ勉メ〻ヘシ仰キ願クハ政府ニ於テモ既ニ命令セラルヘ御下付金ノ一倍即チ貳百六十万圓ニ御增加アラン

明治十五年十一月十日

大臣

農

金

右

参

チ目下國費御多端ノ際頗ル悚懼ニ堪ヘスト雖ヒ篤ク本業ノ重要ナルヲ察セラレ特殊ノ御詮議ヲ以テ前述ノ請願ヲ御裁納被成下度奉懇願候也

明治十五年十月

共同運輸會社發起人惣代

連署

農商務卿西郷從道殿

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

秘

農甲二四七號

明治十五年十一月十日

大臣

内閣書記官

農商務省伺共同運輸會社資本金增額之事

右回議ス供ス

参議

大木喬任　伊藤博文　西郷隆盛　山田顯義　大山巌　福岡孝弟

山縣有朋　井上馨　松方正義　川村純義　佐野常民

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

明治十五年十一月七日

第一局

掛参議

書記官

別紙農商務省伺共同運搬會社資本金増額ノ義ニ付稟議ノ趣ヲ案スルニ畧ニ創立ノ際資本金三百萬圓ト定メ其内百三拾萬圓ハ政府ヨリ内下付ニ相成ル旨御決定ニ成ル處今其營業ノ目途ヲ擴張シ資本ヲ増加セントスルハ其事甚タ嘉スヘシト雖モ隨テ政府ノ下付金ヲ増加スルハ今日理財上ニ於テ困難ナキニアラス然リト雖モ之ヲ許可セサレサル時ハ大ニ人民ノ志氣ヲ沮喪シ適ヘ將ニ發達セントスルノ事業モ為メニ其進路ヲ挫折スヘキノミ

十ヲ以テ現今着手中ノモノニ繰響シ十分ノ結果ヲ得ン能ハサルノ恐レナキニ至ラス尤レモ本年度中ニ於テ支出ノ要スル義ニモ当ニ之ヲ到既スルモノトセハ自然支出ノ道モ亦之ト共ニ存在同右請願ハ御允許ヲ乞フ能ハサルノ果シテ如何高裁ニ出ル也

御指令案

上申之趣聞届ケ案大蔵省ヘ協議ノ為メ金額支出方ニ付テハ今書改正案ニ取調更ニ之ヲ出ス事

明治十五年十月十六日

検査院

大蔵卿

共同運輸會社ヘ可下渡汽船製造總理及監督員派出之義ニ付伺

共同運輸會社江可下渡汽船二艘金百萬圓ヲ以テ歐羅巴江注文製造着手ニ付右金額支出方之義ハ本月八日附ヲ以テ稟申仕候通ニ有之候就テハ別紙甲號之通右製造事業全般總理トシテ共同運輸會社々長及ヒ乙號之通工事其他之監督トシテ當省雇英人ブラウン派遣為致度然ルニ右落成期限ハ過般陳述仕候通凡ソ十ケ月ト見積往返共槩略一ケ年半ノ見込ヲ以テ出張為致候就テハブラウン義ハ海員試験并船舶検査等目下必要之者ニ有之候得共他ニ適任者無之ニ付不得止同人差出候義ニ付右海員試験船舶検査等之為メ一時他ニ適任ノ者ヲ雇入候積ニ